

入試探訪 [英語]：素材と設問から学ぶ — 高校入試と大学入試の相関 —

龍谷大学附属平安中高等学校 校長補佐 平井正朗

様々な分野で国内のリーディング・ポジションにある東京大学の入試問題は、ある意味、高校入試作問においても大きなウェートを占めているのではないと思われる。本稿では大阪府立進学指導特色校文理学科を事例に考察した上で私見を述べる。

文理学科の入試問題は英語Bに位置づけられており、グローバルビジネス科、英語科、国際教養科、グローバル科と同じカテゴリーで100点満点である。全体を概観すると英文のReadabilityは英検準2級もしくは高1レベル、量はパラグラフ・リーディングと速読力を要するものであり、読解力・作文力の差が得点率に反映するものとなっている。また、随所にセンター試験や東京大、京都大などの入試を想定しているかのような設問形式も散見されるので、中学3年生でもかなり英文を読み込み、問題慣れた生徒でなければ難しい。

ジャンルの比率は読解が76.0%、リスニングが24.0%であるが、読解問題では英作文50%、要約

18.4%、補充及び内容真偽13.2%、整序5.3%であり、英語表現力がポイントとなっている。文法事項は分詞の後置修飾、間接疑問、接触節、比較級・最上級、不定詞、受動態など、頻度の高い項目は固定化しているが、一文中に複数項目がからみあう応用問題が多く、ケアレスミスに注意したい。3カ年の比較はI(下の表)の通りである。

東京大学(前期)の入試問題と比較してみると、質の違いこそあれ、II(右ページの表)における[]が共通項、[]は出題年度である。

東京大学の入試対策のシラバスの方向性を考えるとIII(右ページの表)のような視点が導けるが、行きつくところは国際社会に通用するグローバル・リーダーズ育成ということになる。

文理学科の対話文読解では、3カ年を通じてグローバル・リーダーズ育成というタテ糸的視点、2011と2012は異文化理解、2013は日本文化の発信というヨコ糸的視点が垣間見れる。2011は、日米文化

I 文理学科入試問題の3カ年比較

年度	概要
2011	問題1 読解：対話文読解 [28点] ⇒ テーマ「俳句と周期ゼミ」 問題2 読解：スピーチ原稿読解 [41点] ⇒ テーマ「地図」 問題3 英作：課題英作文 [16点] ⇒ テーマ「図表読み取りと部活動について」(約40語) 問題4 リスニング [25点] (A・B問題共通)
2012	問題1 読解：対話文読解 [40点] ⇒ テーマ「観察：モーニンググローリー」 問題2 読解：スピーチ原稿読解 [55点] ⇒ テーマ「メディアからの情報収集」 * 課題英作文を問題2に吸収 英語リスニング [25点] (A・B問題共通)
2013	問題1 読解：対話文読解 [32点] ⇒ テーマ「コウノトリ」 問題2 読解：スピーチ原稿読解 [44点] ⇒ テーマ「大阪産(もん)」 英語リスニング [24点] (A・B問題共通)

II 東京大学(前期)入試問題との比較

- 第1問 **要約** [70～80字、2011～13] / **段落整序** [2011～12]
文脈把握 [2011] / **空所補充** [2013] * One Paragraph One Idea
【ポイント】 速読を通じたパラグラフ・リーディングとcontext把握力、日本語表現能力
- 第2問 **課題英作文** [2011] / **語彙類推** [2012]
自由英作文 [50～60語、2011～13] * 英検2級の2次面接を想起
【ポイント】 背景知識に基づく複眼的視点から自己表現する力
cf. 京都大学：英訳 [2011～13]
【ポイント】 日英語の高度な翻訳力
- 第3問 **リスニング** [約30分、パート3] * 各パート450～600語程度
【ポイント】 レクチャー、ディスカッションを速聴できる力
 過去問題活用と聴きながら推論する力(記述含む) * 2013 ディクテーションは消滅
- 第4問 **文法** [2011～12] / **語句整序** [2013] / **和訳** [2011～13] / **内容説明** [2013]
【ポイント】 正確な文法知識と文構造分析力 * 取り除くべき語を指摘する問題あり
 本質や真理を探究する素材
cf. 京都大学：抽象度の高い英文和訳 [2011～13]
【ポイント】 ハイレベルな文構造分析力+contextに応じた和訳
- 第5問 **長文総合問題** * エッセイから例年の小説に戻った
cf. 2013 テーマ「子供の頃に会った霊能力者の女性」(設問数減少)
【ポイント】 情報処理能力と柔軟性、総合力

III シラバスの方向性

- ① Reading : 専門分野に関する原書や論文、英字新聞などを精読、速読できる力
- ② Writing : エッセイを論理的な英語で書ける力
- ③ Speaking : 課題発見、解決に向けて自分の考えを英語で述べる力
- ④ Listening : レクチャー、ディスカッションを理解できる力
- ⑤ Testing : 専門分野に関する背景知識、論理的思考力、課題発見・問題解決能力

比較と相互理解をテーマに、俳句と松尾芭蕉から導入を図り、蝉の声と季語をキーワードに日本文化理解へのアプローチと同時に、周期ゼミの発生理由をトピックにアメリカ文化と対比している。2012は、日本とオーストラリアの文化比較と相互理解をテーマに、雲に魚の名前を使う事例として、日本のうろこ雲、いわし雲、さば雲、オーストラリアのa mackerel skyを列挙し、雲と天気の間関係をキーワードにモーニンググローリーを例示、オーストラリア文化理解を促している。2013は、日本文化の発信

を柱に、ドイツ人留学生との相互理解に向けて、コウノトリをキーワードに、野生のコウノトリの絶滅に伴う保護活動や名前のプラスイメージを具体化している。すべてグローバル・リーダーズ育成で円環している点に着目したい。

一方、東京大学ではアカデミックなレベルでグローバル・リーダーズ育成の萌芽が感じられる。2011は科学教育の現状課題として、学科ごとにその歴史と方法論を中心に教育が行われていることを指摘し、あるべき姿として、学生が頭の中で知識が

体系化されるような内容中心の、例えば、時間を一つの枠組みとして教える必要性を提示している。また、2013では、クモの巣が外部の力の強さに応じて反応する柔軟性をもち、局所的に破損しても全体は機能し続け、その原理が耐震建築や安全な通信網の構築に応用できる可能性があることを示唆している。2012では、多くの先進国における移民の増加に伴い、国民性の分裂が危惧されてはいるが、通信技術の進展により故郷の家族や友人と絆を保つことができ、その絆が地理的に隣接しない新たな社会を創出しているというプロット、また、ニューヨークに住むインド人女性が3歳の娘に母国の伝統を伝え、民族性を示すために1カ月だけサリーを着るというストーリーも興味深い。

＊

現場に目線に移すと、中高ともに長文読解を中心とする設問対応の入試情報はあがるが、英作文となるとどうやって勉強してよいかわからないという生徒が多いように思われる。英語表現力を測定する場合、与えられたトピックについて自由に書く「トピック指定」（自由英作文、テーマ英作文）、場面や状況など、指定された条件に応じて書く「条件指定」、空所で与えられた語句を整理する「文構造理解」に分類されるが、圧倒的に多いのが「トピック指定」である。

東京大学の英作文においては、2011はIt is not possible to understand other people's pain. について、2012は「もし他人の心が読めたらどうなるか、考えられる結果」について共に50～60語の英語で記すという内容であった。2013から新しい出題形式も加わり、英検2級の2次面接を想起させるような写真に写る二人の人物の会話を自由に想像して、60～70語程度の英語で記すという問題と「これまで学校や学校以外の場で学んできたことの中で、あなたが最も大切だと思うことは何か、またそれはなぜか。」を50～60語の英語でまとめる問題が出題されている。文理学科では2013を例にとれば、大阪と日本の農業産出量に占める野菜の割合を30語程度、また、本文中のI hope that more people know about traditional vegetables made in Osaka and eat them. について、どのようなことをすればよいか、自分の意見を20語程度の英語で述べるというものであったが、計16点にも及ぶ。英作

文については、設問形式のバリエーションはあるが、高校及び大学入試共に現代社会に生きる青少年が関心を寄せてしかるべきテーマが選ばれており、日々の授業における素材選びのヒントが隠されているように思われる。できるだけ早い段階から1文から2文、2文から複数文、複数文からパラグラフへと段階的にレベルアップさせていき、その中で結束性や一貫性を意識した指導を織り交ぜながら、つながりをもたせた文章を書かせるコーチングが必要である。同時にブレインストーミングによって書こうとしていることを整理し、それをまとめてパラグラフ化する習慣も身につけさせたい。

＊

世界が求める学力観、言い換えれば、「チーム・グローバル」におけるシンクロニシティ（共時性）が叫ばれる昨今、高度専門分野で働く外国人の日本素通りに代表されるわが国の島国学力観は、国際競争力（IMD）、世界大学ランキング（THE）などを調べれば一目瞭然である。グローバル化の波に乗り遅れた日本企業は、「選択と集中」による収益直結の経営戦略を通じて「ガラパゴス化」を打破しようと懸命である。世界の英語学習者が20億を超え、Return on Englishの時代、アジア成長に伴うEnglish as an Asian Languageやグローバルビシユの普及が加速化され、社内英語公用語化も珍しい光景ではなくなってきた。

EFL環境での英語教育のあり方を展望すると、国際社会に通用する人間力育成をキーワードに学習者自立、探求意欲、背景知識、ロジカルでクリティカルな思考力、問題解決能力、プレゼンテーション能力、アイデンティティ育成などを視野にいれ、コミュニケーション能力育成と受験学力の両立に努めていかなければならない。

高等学校においては、「授業は英語で」をキーワードに、Can-do statementsとそのPDCAを基盤にTeacher-centeredからInteraction中心の授業展開へ転換がなされようとしている。50分授業のほとんどが日本語で行われている現状から生じる英語で英語を処理できない状況、つまり、漢文処理と同じGrammar Translation Method脱却へのメッセージである。学校の主役が生徒であることを考えると、「授業は英語で」の意味は、生徒のために英語を積極的に使う教員の姿勢とも言える。これは中高とも

にあてはまる。勿論、授業全体をすべてEnglishにするとというわけではなく、Exposure、Experienceの中で英語を用いるということ、例えば、前時内容を盛り込んだ授業前のsmall talk、パラフレーズ、絵などからのアプローチもその一例であろう。

少子化、経済不況、学力低下という趨勢の中、アラウンド・ゼロ世代（2000年前後に生まれた世代）に向けて、文科省から英語力向上のための「5つの提言」がなされ、「小中高を通じた英語教育強化推進事業」が提示されている。また、大学における英語教育も転換期を迎え、英語による専門分野の授業、原書を大量に読み、英語によるグループ・プレゼンテーション、グループ・ディスカッション、ディベート中心の授業、英文記述式の定期試験など、様々なイノベーションが行われているようであるが、中高で伝統的な文法訳読に慣れ親しんできた学生にとって、大学での授業に慣れるまでたいへんだという“声”が聞こえてくる。

「ビジネスで役に立たない受験英語」にメスが入り、TOEFL活用、意欲や能力、適性などを総合的に評価するセンター試験、学力偏重型の「サイコロ」入試からの転換が検討され始めている。また、グローバル化に伴う需要拡大、新学習指導要領施行、単語数増加、高校におけるオールイングリッシュ等の影響で、語学ビジネス市場も上向きと聞く。我々、中高現場では、教室での経験を振り返り、自分の指導に対する理解を深めることにより成長を志向するリフレクティブ・プラクティスが必須となる。慣れ親しんだ指導法から一歩踏み出して新たな指導の型を創り出す努力、即ち、マイナーチェンジでよいから生徒のために地に足がついた指導ができるかどうか問われているような気がしてならない。

筆者の場合、未知語の類推も含め、言葉の意味を説明したり、表現を言い換えることができる力、スキミング、スキミング、多読の活用などを通して、読んだ内容を簡潔にまとめることができる力、文と文のつながり、パラグラフとパラグラフとのつながりをしっかりとおさえ、まとまりのある英文を書くことができる力、質問、応答、同意、反論等も含めてまとまりのある英語を聴き、話すことができる力の育成を念頭にいたシラバスを勘案することになっている。

技能統合型の評価方法として、定期考査における

聴解力測定では、インタビュー形式のOral Proficiency Interviewやディクテーション・テストを導入した。読解力測定では、多読力・速読力に重点を置き、ダイアグラムやヴィジュアルな図や絵など、言語外の文脈に置換するPragmatic Mapping Test、作文力測定では、共通テーマに基づく自由英作文を課し、採点基準を明確化すると同時にネイティブ・スピーカーを含む複数採点という取り組みも模索している（テクニックで正解が得られる部分英作ではなく、context重視の完全英作による整序など）。

小学校では、年間35コマ×2年間、ALT加配も伴い、ListeningとSpeakingに力点を置く分、中学校におけるReadingとWritingとの連携が必要となってくる。また、高校においては、中高接続と導入のあり方、「コミュニケーション英語Ⅰ」と「英語表現Ⅰ」の連動と評価基準など、様々な検討事項が浮上してくる。到達目標を明文化したシラバス作成と素材選び、アウトプットにおけるラウンド的指導展開、内容理解と語彙やForm学習との連動、Assignmentの組み立てなど、さらなる精査を積み重ねていきたい。

〈参考文献〉

『2012年受験用 全国大学入試問題正解 英語（国公立大編）』旺文社
 『2013年受験用 全国大学入試問題正解 英語（国公立大編）』旺文社
 その他、新聞、予備校ホームページ等で公開された入試問題を参照した。

